ＴＨＥＬＡＳＴＭＥＭＯＲＹ～第0使徒風斬レン～

風斬　澪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴＨＥＬＡＳＴＭＥＭＯＲＹ～第０使徒風斬レン～

【Ｎコード】
Ｎ１５７０Ｚ

【作者名】
風斬　澪

【あらすじ】
エクソシスト風斬レンは、ノアメモリーが覚醒したため教団を去る
彼女の運命は如何に！？

第０夜～別れ～

―あの惨劇から約５年―

ドガァンッ！！

何かが壊れる音とともにゴーレムから室長、コムイ・リーから通達が入る

≪通達！通達！ホームの壁が何者かに破壊された模様！≫

≪ただちに確認へ向かえ！≫

「メンドくせ」

そうつぶやいたのは、イノセンス‘六幻’をもつエクソシスト神田ユウだ

面倒だ、と言いながらも指令なのでとりあえず音がした部屋へ

向かう

向かった部屋に住んでいるのは、エクソシスト風斬レンだ

神田が着いたときには、時既に遅し、住人風斬レンの姿も、彼女のイノセンス、炎乱、も無くなっていた

神田はゴーレムの向こうにいるコムイへ言った

「おい、コムイ」

≪神田くん？≫

「壁を壊したヤツがわかった」

≪それは誰だい？≫

「多分、レンだろうイノセンスも無くなってる　俺はアイツを追う」

≪無茶だよ、神田くん　それにどうして彼女が逃げたってわかるのさ≫

「机の上にメモがあった〈げんきでね〉ってな、おまけに〈さよなら〉そう書いてある」

≪…そういうことか、＜室長！レンがどこにいるかわかりました！＞どこだい！？＜崖を降りたトコの森です！＞≫

≪神田くん！レンちゃんを追って！≫

「了解、門を開けろコムイ」

≪急いで！神田くん≫

「壁、壊してきちゃったけど門から出た方が良かったかな」

ハァ、と溜息をつく藍色の髪の少女、彼女の足にはさっきまで傷があったのだろうか血痕がある

「急がないと、教団の追手がくる」

「オイ」

ふいに背後から聞き覚えのある声に呼び止められた少女は、振り向いて絶句する

「……げっ！ユウ！？」

彼女を呼び止めたのは神田ユウだ

「レン、お前こんなトコでなにしてる？」

彼女、――レンは、動揺していたがとりあえず一言

「…ユウに話す必要があるの？」

レンがそういうと神田は自身のイノセンス‘六幻’の切っ先をレンの首にあてた、そして

「なにがあった？」

と、問うだが、レンは目を伏せ話そうとはしなかった　しばらくたってレンが口を開く

「……いえない…言えないよ…」

まるで今にも消えてしまいそうなほどか細く、小さな声で言った

よく見ると彼女の頬には涙がつたっている

神田は何かを察したのだろうか、六幻を鞘へおさめた　そして、神田はレンを抱き寄せた

「！？…ユウ？　」

「…お前が何をしようと俺の知ったことじゃねぇ…だから、話さなくていい」

そう言って神田はレンのことを少し強く抱きしめた

「ユウ…ありがとう」

レンはそういうと、普段見せている笑顔で神田に笑いかけた、まるでもう大丈夫だよ、そう言わんばかりの笑顔で

「ああ」

神田は短くそう返すとレンを離す

「それで？レンお前これからどうするつもりだ？」

「えっと…どうしよう、一日早く出てきたから、何にも考えてない…」

「ハア？一日早くでてきた？どうしてだ」

「私は、もう教団に戻ることはないだろうからじゃないかな～」

『教団に戻ることはない』そう言ったレンの表情には、寂しさと悲しみが混ざっていた

「なぁ、レン」

「何？」

「お前明日まで、一人でココにいるつもりか」

「まぁ、明日まで向かえは来ない…かな」

「明日まで、明日までお前のそばにいてやる」

「ハイ？今なんと？」

なぜか、そう言い返すレンの目は点になっている

なぜなら、普段の神田が『そばにいてやる』なんて言葉いうハズがないからだ

「いやいやいやユウ！アンタ本部に戻れ！」

「なんでだ？」

「なんでもなにも　アンタエクソシストでしょーが！」

心なしか先程のレンと比べると語気か荒くなった気がしないでもない　こんなやり取りがしばらく続き

「とりあえず、落ち着けレン」

神田のその一言でレンはとりあえず落ち着く、そして、核心に迫る

「なんで？わたしは、裏切り者だよ？」

「裏切り者だか、知ったことかよ　お前はお前だろ？」

「！…そうだね」

少しの間レンは黙る　そして、空を見上げると『もう、夜か』そうつぶやくと野原に寝転がる

すると、レンは突然感嘆の声をもらす

「きれい…」

「レン？どうした」

神田は、レンが寝転んでいるのをみると　同じ様に寝転がった

「すげぇな」

レンと神田が見たのは、夜空一面に広がる星　一つ一つ色こそ違うが夜空に良くはえてとても美しい

「ユウ？」

「なんだよ」

「ありがとう　大好きだよ、ユウ」

「ああ」

「おやすみ…」

「それじゃ、ユウ元気でね　リナちゃんにもよろしく言っといて」

「待て」

歩き出したレンをいきなり呼び止め　何かを投げた

「それ、持っとけ」

神田が投げてレンに渡したもの、それは

「ネックレス？　うん、わかった」

そして彼女は森の奥へと姿を消した　その日以来彼女の姿を見たものはいない

ノアを除いて――

第０夜～別れ～（後書き）

駄文ですがどうぞよろしく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1570z/

ＴＨＥＬＡＳＴＭＥＭＯＲＹ～第0使徒風斬レン～

2011年12月5日19時06分発行